地域で創る理想の放課後
―みんなで開発しよう！あそび×デザイン思考で創造性を伸ばす放課後プログラム―

「地域志向活動助成金」活動の概要

やわたの森Kids代表　三浦雅代

１．やわたの森Kidsの概要

（１）団体の目的と概要

急速に変わりゆく
不安時代を生きる
こどもたちに

ワクワクの未来を創る
「自在にモノコトを
創る力」を贈る

課外プログラムを

やわたの森Kidsは2020年8月に市川市に任意団体として設立された。急速に変貌する時代であっても、子どもたちが豊かに生きられるよう、不安な将来を自らが望むワクワクの未来に変えられる力＝ゼロからものごとを創り出す力を育成するため、主に小学生向け課外プログラムの開発・提供すること、また、同理解醸成のための保護者向け啓蒙活動等を行うことをミッションとする。2021年2月1日現在、代表理事を三浦雅代が務め、現在会員5名、学生ボランティア7名。全員が無報酬のボランティアである。なお、将来的には、より広く子どもや保護者達にサービスを持続的に提供できるよう、社会的インパクトをビジネスの手法で達成する「ソーシャルビジネス」としての体制を整える計画。

（２）2020年度活動成果

2020年度、やわたの森Kidsは、<u>団体としての体制強化と、小学生向け「ゼロから創る力」を育むプログラムのプロトタイプの開発と試行、地域リソースの動員方法の検討と試行、ゼロから創る力に対する保護者向け理解向上や支援策のありかたの検討</u>などを行ってきた。

特に小学生向けプログラムについては、2020年度千葉商科大学「地域志向活動助成金」を賜り、主に以下のような大きな成果を得ることができた。

① <u>小学生向け「ゼロから創る力」を育むプログラムのプロトタイプの完成、試行</u>：
(i)イノベーションを生み出す世界標準のアプローチ「デザイン思考」[1]に基づき、小学生がリアルな社会問題に取り組むプログラム「4D4D」、(ii)遊びやアートを通じて小学生等がじっくりゆっくり創意工夫しながら創作する体験により自由な発想を広げるプログラム「Playful」のプロトタイプ（モデル）を開発した。これら(i)、(ii)を組み合わせることにより、創作で自由な発想を広げる→自由な発想で課題解決や新たな価値提案の体験を行う「やわたの森ダイアモンド」という独自のプログラム構成を完成した。プログラムの内容やそのデリバリー方法は、カスタマーへのサービス試行提供（2020年9月、12月、2021年3月）や第三者フィードバックを通じて、内容の改善を繰り返し、来年度以降本格運用できるレベルとなった。参考までに、2021年3月に実施したプログラムの概要を別添1に示す。

---

[1] イノベーションを創出するために有効として、世界的なデザインファーム「IDEO」により提唱されたアプローチ。デザイナー・設計者のごとく、人間を中心に据え、観察、共感を経て、問題定義、アイディア化、プロトタイプづくり、実験といったプロセスを反復するアプローチ。

更に、「手を放して目を離さず」「すべてをまずは受け入れる安心の環境づくり」等、子どもが本来持つ学ぶ力を発揮し発展できるように後押しする子どもへの寄り添い方をとりまとめた「Side By Side」、プログラム実施の要となるファシリテーション方法を確立した。現在メンバーである学生ボランティアもファシリテーション能力を獲得した。

② 地域のリソースを動員し、学び合い、知の共創の場としての組織強化：

やわたの森Kidsは、活動の持続可能性とより広い社会的インパクトの創出のため、地域リソースの動員と協働に重きを置く。2020年度御校教員・学生との協働プロジェクトにおいても、「デザイン思考」に基づき新たな知や価値を共創することに注力した。教員・学生さんとのミーティングや勉強会、練習会は特に年度の後半は週に1度の頻度に及び、まさに協働プロジェクトとなったといえる。

競争の過程は、具体的には、良い問いを立て、箱の外から自由に発想、試行・試作を繰り返して物事を創造する「デザイン思考」のアプローチでプロジェクトを運営し、上記①の新たなプログラムの完成に至った。また、学生さん含めたメンバーの個性や強みを最大限に生かせるような環境や関係づくりに注力した。結果、参加した学生からも、やわたの森Kidsは安心と学びの場であり、デザイン思考に基づき共同でものごとを生み出すといった学校では得られない知見や経験を多く得たとの評価を受けた。

同時に、やわたの森Kidsメンバー（社会人）にとってもプロジェクトマネジメントや共創の経験に関し、非常に深い知見を得ることができた。また、やわたの森Kidsの理念に共感する御校以外の学生ボランティアや保護者ボランティアの参画も得、共感→社会を変える地域の行動は少しずつではあるが、ひろがりつつあると感じられる。更に、共創の結果は市川市で活動する他の任意団体との議論や情報交換、セミナー登壇を通じ、市川をはじめとする社会の財産として共有されつつある。

社会人と学生がともに学び合い、新たな知を共に創造することができたことは、やわたの森Kidsが「地域の学びの場」としての機能を強化し、さらなる社会的インパクトの創出に向けた新たな役割を果たす可能性を開いたといえる。

③ ソーシャルビジネス立ち上げ実験の基盤づくり：

上記②で述べた持続可能性及び社会的インパクト創出の観点から、やわたの森Kidsは将来的にはビジネスの手法で社会的目的を達成するソーシャルビジネスとしての可能性を検討している。2020年度助成活動を通じた御校・学生との協働は、特に、人材リソースの確保と社会的インパクト創出に向けた活用（後押し）方法につき、深い洞察を与えた。

ボランティア／非営利組織はソーシャルビジネスにおいても重要な担い手とされるものの、情報（マーケットシグナルとマネジメントへの活用）、動機、資金（グラント）、能力（アマチュア）といった観点から、広く社会的インパクトを輩出する目的においては限界があり、所謂ボランティアセクターの失敗といわれている[2]。2020年度助成活動では、学生ボランティアが、やわたの森Kidsの目指す質の高いプログラムの開発と提供という目的を真の意味で理解し、これらのボランティアセクターの失敗を乗り越えて、社会的インパクトを出していくための、やわたの森Kidsのリーダーシップ、マネジメントの在り方につき、トライアンドエラーで取り組む機会を得た。学生ボランティアが高い社会イ

[2] Salamon, L. M., (1987), “Of Market Failure, Voluntary Failure, and Third-Party Government: Toward a Theory of Government-Nonprofit Relations in the Modern Welfare State”, Journal of Voluntary Action Research

ンパクトに向けて動けるような動機は何か、非営利組織のサービスへの適性値段は何か、非営利組織が質の高いサービスを提供できるようにするための仕組みは何か等の重要な論点につき、学生さんとの協働や議論を行った。

以上を通じ、やわたの森Kidsは、新しいボランティア＝「ボランティア+アントロプレナー＝ボラントロプレナー」（仮称）に基づくソーシャルビジネスの運営につき、深い洞察を得ることができた。我々にかかる機会を与えてくれた起業精神あふれる学生さんボラントロプレナーに感謝するとともに、特にコロナ禍にあったこの一年間、学生さんに対しては微力ながらも居場所、学びの場、活躍の場といった様々な機会を提供できたご縁と、これをあたたかく見守ってくださった佐藤教授、千葉商科大学社会連携推進課の各位に感謝している。

④ その他：

この他、我々が開発した子どものゼロから創る力を伸ばすアプローチについて、広く保護者の理解を醸成するため、セミナー登壇やSNS発信などを通じて、保護者へのアプローチに着手した。将来的には、保護者を含めた地域全体で子どものゼロから創る力の育成を後押しする仕組みづくりにつなげる計画。

2020年度は、その実験として、やわたの森Kids代表三浦は以下に着手した。ゆくゆくはこれらの活動を活性化し、ここで得られたつながりが、やわたの森Kidsの活動への賛同や、ゼロか」ら創る力への理解醸成に裨益することを期待。活動を実施する中、支援や理解醸成の活動へのニーズが強く感じられたところ、2021年度はこのラインの活動についても積極的に展開したい考え。

（i） やわたの森Early Birds（任意サークル）を立ち上げ、子育てで忙しい母親が、週末の早朝に、自分にフォーカスした時間を過ごし、母親という役割やママ友という枠から離れて自分らしく地域の仲間とのつながりをつくるきっかけを提供する構想を完成。

（ii） いちかわTMO卒業生、創作アトリエいろどりの森やふくろうの森といった団体と共に、市内の緑地保護に向け、自然や森を多くの市民に親しんでもらうイベントを企画・実施（12月に開催済み、3月開催予定）。

（iii） いちかわTMO卒業生と共に、子育て中ママの暮らしや人生の課題を整理し、必要な支援や寄り添いにつなげるオンラインを中心とする活動を行うグループ「暮らしのてらす」の立ち上げに参画、協働で保護者支援を展開できるよう準備を進めている。市川都民、高い人口流動性により市内で孤立しがちなママたちに地域でのつながりを提供し、地域のつながりや課題解決能力の底上げに寄与したい考え。

別添１

小学生向けゼロから創る力を育むプログラム
ミライを創るモリノテ（3/28）実施概要（報告）

やわたの森Kids代表　三浦雅代

１．目的

このプログラムでは、主に小学生が、既存の枠組みにとらわれない自由で多様な発想で、創作や課題解決に取り組むよう後押しした。これを通じて、こどもたちが創造的に課題を解決したり、新たな価値を提案したりできるための「ゼロから創る力」を育む第一歩として、その根底にある創造の楽しさ、自信や経験を提供した。

２．プログラム概要

（１）午前中：自由で多様な発想を刺激する創作プログラムPlayful

グループで街を探索しながら、道路や壁の隙間に生えている植物を探し、写真撮影や一部採取を行った。プログラム会場に到着後、各参加者が撮影したお気に入りの写真をスライドで投影して、鑑賞会を行った。どの参加者も自分がとった写真を誇らしげに説明し、大人や学生にポジティブなコメントを得て、更に自信溢れる表情になっていた。

その後、各自、採取した植物をステンシルで花瓶の土台（木製）にプリントし、花瓶を完成。そこに採取した植物を思い思いに生けて、参加者全員の前で発表した。参加者は植物のプリントの仕方、写された植物の形や、色の重なり具合など、集中しながら創作を探求しあり工夫を凝らしたりしていた。丁寧な創作で美しくプリントをしたり、大胆な色遣いをしたり、桜の花びらを写した季節限定の花瓶に仕上げたり。作品は全て、それぞれの個性が投影された自由で多様な創作となったといえる。

（２）お昼：森について学ぶコーナー

午後の森に関するプログラムの導入として、学生の劇を通じて会場は一気に森に迷い込む演出をした。その中で、参加者は、国府台緑地で森林保護活動に取り組む社会人による、笑いと楽しさがたくさんつまったクイズ形式のレクチャーとゲームに取り組んだ。クイズは、人間の営みや地球環境における森の大切さについて楽しく学ぶ内容。子ども達は積極的に手を上げて参加した。ゲームは、自らが木になり、香りをつかってコミュニケーションをとる自然の力について五感を使って体感した。

（3）午後：リアルな社会問題に取り組む課題解決型プログラム４Ｄ４Ｄ

午後は、森を保全する第一歩として、より多くの人々に森を楽しんでもらえるためのアイディアを考え、それを工作や絵などで第三者に伝えることに取り組んだ。プログラムは、イノベーションを生むための世界標準である「デザイン思考」に基づき構成。まずは、森にまつわる様々な気持ちについて意見交換し、いろいろな考えがあることを理解。その後、そのような多様な意見をもつ様々な人たちが森を楽しむためのアイディアについて議論。その上で、各自で、「〇〇（誰）が森を楽しめるよう〇〇（場所、商品、イベント等）を創る！」宣言を行い、工作や絵などで自分の森を楽しむアイディアを表現した。最後は、保護者参加の下、自分のアイディアと創作を披露した。

本プログラムはワークショップ形式で実施し、いつもの発想の枠組みから出て、より自由なアプローチで課題解決に取り組めるようファシリテーションをした。具体的には、森が好きな参加者であっても森が苦手な人の気持ちにも配慮したアイディアを考えたり、他の参加者のアイディアを統合して新たなアイディアを創造したり、また、例えば、虫が嫌いという意見でも、生態系における虫の大切さについて理解を掘り下げた上でこの短所を克服したり、逆に楽しんでしまうようなアイディアを考えるように促したりした。また、参加者は意見交換の過程で、お昼の森のクイズで学んだ、例えば、森から海まで自然界がつながっていること等の内容を自ら思い出して、自分のアイディアに反映させようと努力している姿が印象的だった。

結果、いくつかの作品にはこのような複眼的な視点で取り組んだアイディアが随所に見られた。アイディアを表現する創作も、多種多様かつ個性的なものであふれた。最後の発表は、高学年を中心に実施、自分の作品を発表した後の参加者はどの子も自信であふれていた。低学年の参加者の一部ははじめての発表の機会だったのか、遠慮する姿がみられたが、学生がその気持ちを代弁する形で発表を行えていた。

３．成果

- ✓ 参加者から、楽しかった、もっとやりたいという声がやまなかった。プログラム実施過程では、学生スタッフに支えられ、安心感と自由な雰囲気の中、集中して真剣に議論や創作に取り組む姿が見られた。限られた時間の中、探求と創作の機会を十分に提供できたと評価可能。また、できあがった作品には、前述のとおり、自由な多様な表現がなされ、「箱の外から」物事を考え、複眼的な視点で課題解決に取り組んだ成果が多くみられた。発表会や終了後の子ども達は、達成感と自信であふれる表情と様子がうかがえた。
- ✓ 保護者アンケートでは、多くのこどもたちが帰宅後も興奮が冷めず、発表会に参加できなかった家族に何度も当日体験したことを話したり、作品の発表会を行ったりしていたと報告を得た。また、事務局との会話の中で、何人かの保護者が、自らの職業経験等からゼロから創る力の大切さ、現行学校っ教育ではこれを育てる機会が得られないことなどへの問題意識に言及があり、今後もモリノテに参加したいといったフィードバックを得ることができたのは貴重。
- ✓ 以上、総じて今回の目的である、安心、楽しい、創ることへの達成感と自信をこどもたちに贈ることができたと評価可能。
- ✓ 学生さんは、今回、全く新しいプログラムをゼロから創り上げる経験に粘り強く取り組めた。当日は、全員がこどもと楽しく議論や創作に打ち込んでいた。複雑なプログラムの内容とロジ回しにもかかわらず、それぞれの個性、それぞれのアプローチで、「手を放して目を離さず」こどもたちの創る力の後押しに取り組むことができ、大変活躍していた。モリノテは、この頼もしい相棒たち「ボラントロプレナーズ」なしにはこのような成功を収めることができなかったことは言を待たない。

以上